

歴認研・訪韓報告③

韓国における近現代史見直し

— 李承晩の評価をめぐる —

江崎 道朗（評論家・麗澤大学客員教授）

●この目で確かめることの重要さ

百聞は一見に如かず。たとえ百回聞くより、一度でも自分自身の目で見た方が分かることが多い。特に国際政治、近現代史研究においては、いくら情報を集めようとも、それはあくまで自分自身の勝手な受け止め方で情報を整理しているに過ぎないことが多い。

実際に相手国を訪問し、関係者と直接会ってみて初めて、膨大な情報のどこがポイントなのか、その情報をいかに受け止めるべきなのかが分かる場合が少なくない。

だから永田町で仕事をしているときも、当然のことだが、マスコミ報道などで交渉相手の情報を懸命に集めて会合に臨むが、こちらが想定していた論点、要求とは違うことを相手が求めてくる場合が多かった。マスコミ報道はやはり限界があり、かつ、相手が本当のところ、どう思っているのかは、直接会って確かめる方が確実なのだ。

これは言い換えると、自分の都合のいいように物事は運ばない、ということでもある。自分の頭の中で自分にとって都合のいい物語を組み立てたところで、相手はそう考えてくれるとは限らないし、大抵の場合、自分の想定とは全く違う反応を返してくることが多い。

では、事前の調査は無意味かと言えば、そうではない。やはり徹底した事前調査は大事だ。その際、特に重要なのは歴史、それまでの経緯を知ることだ。当時は分からなかったこともその後の情報公開で、当時の人々の判断の背景に何があったのか、歴史を研究することである程度、見えてくるものがあるからだ。

こうした永田町でのささやかな体験があったので、2016年夏に評論家に専念するようになってからも、いわゆる時事評論だけでなく、国際関係に関する歴史、特に近現代史の本も書いてきた。その際、相手側がどのような意図をもち、実際にどのような行動をしてきたのか、その事実をできるだけ公刊情報に基づいて描こうとしてきたし、積極的に外国への取材も行い、自分の目で実際に何が起きているのか、確かめるようにしてきた。

よって西岡力先生、高橋史朗先生たちが歴史認識問題研究会を創設した際も、喜んで参加させていただいた。歴史研究、そして歴史と政治の関係を考察する歴史認識問題を研究することは、対外政策を進めるうえで必須だと思っていたからだ。

この歴史認識問題研究会の役員有志で2023年3月、韓国を訪問し、韓国における近現代史の舞台となった各地の史跡と博物館を訪問するとともに、関係者と意見交換を行った。

たしかに百聞は一見に如かずで、自分自身の目で現地を訪れた方がより多くのものが見えてくるものだ。ただし、同じ現地に行くにしても、「誰と」行くかで、見えてくるものは全く異なってくる。博物館に展示されている写真一葉、石碑一つも、その背景を熟知している方と一緒にいくと、見えてくる世界の深さがまったく違ってくる。その点、今回の取材旅行では、韓国、朝鮮半島の専門家である西岡力先生が全体の訪問計画を立案し、

関係者との会合も設定してくれるという、なんとも贅沢なものであった。

●事実誤認と誤解と無知の上に築かれた日韓関係

実は韓国訪問は今回が初めてではなかった。というよりも、1990年代に私は一週間近く使って、韓国の史跡や関係者と会う取材旅行を二回ほど行ったことがある。その取材旅行を先導してくれたのが、高千穂商科大学の名越二荒之助教授と、日韓教育文化協議会の草開省三理事長たちだった。

きっかけは当時、保守系のなかで台頭していた「嫌韓論」だった。当時の日本政府が歴史認識問題、具体的にはいわゆる過去に関する謝罪外交を展開するようになったことへの反発から、「韓国は嘘つきだ」「もう韓国と関わるのはやめよう」「日韓断交だ」みたいな意見が急増しつつあったのだ。

確かに明治開国以来、韓国、朝鮮半島との関係で日本は本当に苦勞してきた。明治政府が直面した初めての内乱であった西南の役も、対韓政策をめぐる対立がその背景にあった。そして日清戦争、日露戦争も朝鮮半島の動向をめぐる清国（中国）、ロシアと対立したことから起こったものだ。

よって朝鮮半島にはもう関わりたくないという気持ちは分からないわけではなかったが、関わりたくないとすればそれで済む話ではないことは、日本の歴史を見れば分かることだ。

反発するにせよ、関係を深めるにせよ、そもそも朝鮮半島、韓国の歴史、日韓関係の歴史をできるだけ深く理解することが重要ではないのか、そして深く理解すれば、反発するだけでは済まなかった先人たちの苦勞が理解できるはずだと考えたのだ。

そこで1994年冬、名越先生の御自宅に伺い、果たして「嫌韓」で済むのか、歴史的な事実関係を踏まえて大局から日韓関係を論じてほしいと依頼した。

ありがたいことに快諾いただき、私が関わっていた月刊誌の1995年4月号から「日韓両国民へのメッセージ——事実誤認と誤解と無知の上に築かれた日韓関係を清算するために」という連載が始まった。この連載は評判がよく、単行本化してほしいとの読者の意見が多数寄せられたことから、連載は1996年8月号でいったん終わり、単行本化の作業を始めることになった。

せっかく単行本にするならば、日韓関係に関する先行研究を整理するだけでなく、朝鮮総督府関係の資料や当時の新聞・雑誌、そして当時、まだ存命であった戦前の日韓関係を知る方々の話を聞いてまとめよう、ということになった。

かくして名越先生を中心に、多くの方々に執筆を協力していただき、私を含む三名の編集体制で韓国での取材も行うなどして、1年かけて1997年になんと716頁もある『日韓2000年の真実』(後に『日韓共鳴二千年史』と改題して復刊)を発刊した。

この本では、日韓関係を古代史から始まって秀吉の朝鮮出兵、幕末から日清・日露戦争、日韓併合、そして先の大戦、戦後の日韓関係を一通り概括した。おかげさまで読者の評判は良く、「外国との相互理解に資する本だ」との理由で、渡部昇一先生が審査委員を務めていた「上智大学ヨゼフ・ロゲンドロフ賞」をいただいた。この本の編集過程で私は、掲載するすべての原稿についてその根拠となる論文や資料にあたるなどの作業を行いつつ、かなりの原稿を自ら執筆した。

この本を出してから今年で26年目にあたる。ある意味、四半世紀が過ぎたわけで、当時といまとは、日本も韓国もかなり変わってきたし、日韓関係も大きく変わってきた。では具体的にどのように変わってきているのか、四半世紀ぶりに韓国を訪問し、それをこの目で確かめたかった。そして実際に訪問したことで、それまで抱えてきた韓国像、日韓関係史を大きく修正せざるを得ないことが分かった。

韓国取材の全体像は他の方にお任せして私はここで、李承晩と反日政策に絞って論じたい。

●李承晩による反日政策の影響

『日韓共鳴二千年史』では、日韓併合以降の朝鮮統治について、できるだけ客観的な事実を踏まえて多角的に論じた。

当時はまだご存命だった戦中派の韓国側の方々とも議論をしたのだが、その際、多くの方々から「韓国の方々は、私的な場では、日本の統治を好意的に評価してくれるのだが、公的な場だと一転、日本批判になってしまう。それは何故なのか」という話が出された。そしてその要因の一つとして、大韓民国の初代大統領、李承晩による反日政策の影響をあげる人が多かった。

よって、朝鮮統治について当時、私は以下のようなコラムを書いている。

《朝鮮統治に四つの性格

日本の朝鮮統治を評価するに当たって留意しなければならないのは、僅か三十五年の間にその性格にかなりの変遷があるということである。例えば、水田直昌氏はその著『昭和財政史・旧外地財政』（大蔵省編）の中で、統治を四つの期間に分けている。

第一期を、明治四十三年の併合から、大正八年の三・一事件（万歳事件）までとし、その期間を「創業期」と呼ぶ。この時期は、反日武力闘争などが頻発していたので、治安維持のため、かなり厳しい取り締まりを行なった。そのため「武断政治」とも呼ばれている。

第二期をそれ以後、第一次斎藤総督時代から宇垣・山梨総督時代を経て第二次斎藤総督時代までで「守成時代」と呼ぶ。この時期は、朝鮮人による新聞発行を許可したほか、『朝鮮史』編纂事業を始めるなど朝鮮の民族文化・伝統を尊重した政策が重視され、「文化政治」と呼ばれた。

第三期は昭和十二年七月の支那事変勃発のときまでで、これを「建設時代」とする。この時代は僻地にまで初等教育を普及するとともに、農村振興運動を展開し、一般民衆の生活レベルを向上させると共に重工業化を推進した。

異常だった臨戦時代

そして最後の第四期は、南総督時代から終戦に至るまでで、この時代は日本国内でも徐々に戦時体制が強化され、朝鮮では「内鮮一体」のスローガンのもと同化主義政策が推進された。また、日本人に対してと同様、朝鮮人に対しても勤労（労働）奉仕、徴兵などを課し、かなり厳しい統治となった。この時期を「臨戦時代」と呼んでいる。

（中略）現在韓国が非難する「皇民化教育」「創氏改名」「日本語強制」などはすべて「臨戦時代」の政策であることが判る。

日韓両国ともに、この特殊な「非常時」の政策が日本の朝鮮統治のすべてであるかのよ

うに扱っているが、果してそれは学問的に妥当であるだろうか。『京城日報』の記者であった近藤銀一氏も次のように指摘している。

〈(臨戦時代は)最もアブノーマルな形で統治が行なわれた時代である。實際上、この時代は日本の意図してきた朝鮮統治というものが、戦争、それも敗戦の色濃い傍道にそれた時期のことである。従ってこの時期の状況を見て、朝鮮統治の真髄を見るということにはならない。〉

ある一時期だけで日本の統治全体を評価せずに、それぞれの時代の政策を丁寧に検証していきたいものである》(江崎道朗「朝鮮統治 その評価方法」、『日韓2000年の真実』1997年、株式会社国際企画、402頁)

このように35年に及ぶ朝鮮統治を4つの時代区分に分け、それぞれ統治のあり方が異なる点に着目し、冷静な議論をしたい旨のことを書いている。

それは終戦五十年の1995年当時、日本のマスコミは、日本の朝鮮統治を感情的に批判する議論ばかりを紹介する傾向があったことへの、ささやかな反論のつもりだった。

そのうえでこのコラムでは、こう続けている。

《日本統治全否定のからくり

戦中派の韓国人たちの中には、私的な場で「現在の韓国の発展はあの三十六年の間の基礎があったからだ」と、日本の統治を評価してくれる人が多い。ところが、公式の場では、絶対に日本統治の「功」の部分認めようとはしない。何故か。

戦後、朝鮮半島で政権を握ったのは、上海やアメリカに亡命し、反日テロを繰り返してきた李承晩グループと、ソ連の支援を受けて共産主義イデオロギーに染まった金日成グループであった。彼らはともに日本統治がいかなるものかという実体験がないまま、日本憎しの感情に駆られて、日本の統治を「朝鮮人民を奴隷化している」などと観念的に非難してきた。

そうした李承晩及び金日成のグループが日本敗戦後、それぞれアメリカ及びソ連を後ろ盾にして、あたかも占領軍のように朝鮮半島に乗り込み、当時朝鮮にいた民族運動の指導者を排除し、徹底した親日派狩りと言論弾圧を行なった。歴史教育も日本への憎悪感情に燃えたアメリカまたはソ連の歴史観に基づいて行なわれるようになった。

このため、少しでも日本統治の良かった面を話そうものなら弾圧され、最悪の場合、民族の裏切りものとして親族までもが殺された。

言わば、日本全否定史観をもつ米ソ亡命組が体制権力を握り、その下で、日本統治を体験した民衆は自らの体験に基づいて自由に発言できなくなってしまったのである。

そうした構図がいまなお韓国や北朝鮮に続いているが故に、「日本統治はすべて悪かった」という観念的な歴史観が幅をきかせているのではないかと思うのだが、いかがだろうか。》(前掲書、402～403頁)

これを書いた私は当時34歳の若造だったとはいえ、名越先生を始めとする日韓交流を続けてきた識者たちと議論をしたうえで書いたものであり、必ずしも私の思い込みだけで書いたわけではない。

ただし韓国の反日史観の要因を、李承晩の反日政策と、その背後にある当時のアメリカの反日政策に帰するのが果たして本当に正しいのか、断定できるほどの自信がなかったため、「いかがだろうか」みたいな結び方をしたわけだ。

結論から言えば、このコラムを書いてから26年目の今回、西岡先生たちと韓国を訪問し、この分析が表面的なものに過ぎなかったことを痛感させられることになった。

●李承晩学堂との出会い

今回、韓国取材は3月15日(水)の早朝、羽田空港発の飛行機に乗って、ソウルの金浦空港に到着。そのまま車を飛ばしてソウル中心部の日本大使館前に駆けつけた。

毎週水曜日、ここではいわゆる慰安婦像をめぐる賛成派と反対派がデモを行っている。われわれは、慰安婦像の撤去を求めるグループの会合に参加したのだが、参加者の皆さんが韓国の国旗だけでなく、米国の国旗、そして日本の国旗を手に慰安婦像の撤去を求めている様子をこの目で見て、改めて衝撃を受けた。

ソウルの日本大使館前で、慰安婦問題で日本批判をしているグループが毎週水曜日に反日デモを実施していたこと、それに対抗して韓国の保守派が2019年から慰安婦像撤去を求めるカウンターデモを実施していることは、雑誌や動画などを通じて知っていた。

だが、やはり実際にこの目でそのカウンターデモとその参加者たちの様子を見ると、彼らは本気で戦っていることが分かった。私もこうした会合をしてきたことがあるから分かるが、毎週のようにこうやって会合をするのは並大抵の覚悟、意思ではできない。「単なるやらせではないか」みたいな受け止め方をする人が日本にもいるが、実際に会合に参加した結果、ある種の本気さを感じざるを得なかった。

一時間近く会合が続いたあと、近くの食堂でカウンターデモの参加者の皆さんと一緒に昼食をとり、午後はソウル郊外にある「李承晩学堂」に移動した。韓国の「反日史観」の問題点を、社会科学の手法に基づいて事実を踏まえて浮き彫りにした問題作『反日種族主義』を企画し、立案した研究機関だ。

この李承晩学堂では、『反日種族主義』の執筆に関わった李栄薫教授、李宇衍博士、鄭安基博士、朱益鍾博士らが参加しており、以下のような話があった。

- これまでの日韓関係は偽善的なものであった。両国ともに左派が日韓交流を主導してきて、そのシンボルが慰安婦と戦時労働者であり、どちらも嘘に基づいている。
- 日韓両国の保守派の交流は、安全保障と経済だけだった。しかも韓国の右派も、日本の左派の嘘に迎合してきた。2013年になってようやく、真実に基づく韓国の右派が登場してきた。日韓両国の嘘を否定して新しい日韓関係を築こうとしているのが、私たち李承晩学堂のメンバーだ。
- 日本にも、真実を求める私たち韓国右派の存在を理解してくれる人たちが現れてきた。本日、こうやって真実に基づく日韓友好を求める会合を開くことができ、本当に嬉しい。

話を聞いていて、彼らがソウルの日本大使館前の慰安婦像を撤去しようとしているのは、「日本のため」ではなく、韓国のため、歴史の真実を守るためであることを強く感じた。

実はそれまで、「彼らは日本に迎合しているだけではないか」と、心のどこかで疑っていたのだが、それがいかに浅はかで、李承晩学堂の皆さんに対して失礼なことなのか、

それまでろくに知らうともせず、勝手に決めつけていた自分が恥ずかしくなった。

●自由主義者(?)だった李承晩

その後、李承晩学堂の李栄薫校長から、反日愛国のアイコンである李承晩の名前を関した李承晩学堂がなぜ反日に反対する運動を始めたのか、その経緯の説明があった。

話を聞いていて、これはどこかで聞いた話だと思っていたら、『反日種族主義』の「日本語版 序文」に書いてあることであった。

この本の日本語版が出たときに読んでいたが、そのときは「韓国にも反日史観に反対してくれる学者たちがいる」ぐらいの受け止め方で、流し読みをしていただけであった。改めて精読してみると、この「序文」には、李承晩と韓国の反日の関係について極めて重要なことが記されている。李承晩学堂で直接、李栄薫校長から話を伺って、ようやく「序文」の意義を理解できた、というわけだ。やはり直接会って話を聞かないと、何が大事なのか、分からないことが多いのだ。

その意義を、「序文」を引用しながら解説を加えたい。

李栄薫校長は冒頭、次のような問題提起を行っている。

《李承晩学堂は、大韓民国の初代大統領・李承晩（一八七五～一九六五）の一生を再評価し、彼の理念と業績を広く知らしめるために設立された機構です。このたびの『反日種族主義』（本来の韓国語版）は、その李承晩学堂が企画し刊行しました。多くの日本人がこの点を不思議に思うことでしょう。李承晩は強硬な反日政策を採った人物ではなかったか、彼を尊崇しようと設立された機構が、いったいどういうわけで彼の政策を批判する趣旨の本を刊行するというのか、と》(李栄薫編著『反日種族主義』2022年、文春文庫、11頁)

今回、日本大使館前でのカウンターデモに参加したあと、李承晩学堂の事務所を訪れたわけだが、この事務所の名称に「あれ」とひっかかるものを感じていた。

李栄薫校長がおっしゃるように、なぜ李承晩学堂の皆さんが反日デモに反対するのか。1997年に発刊した『日韓共鳴二千年史』において、韓国の反日の遠因は李承晩ではなかったのか、という分析を書いていたので、私自身も強く疑問に感じたことだった。

この疑問に対して、李栄薫校長はこう説明する。

《李承晩は、近世の西ヨーロッパで発生した自由という理念を体系的に理解した最初の韓国人です。彼は、すでにもうにも衰弱し、蘇生の可能性があるのかさえ不透明だった我が民族を「自由の道」に導くのに、その生涯をかけました。一九四五年以後の混乱期に彼が存在していなかったら、「自由人の国」大韓民国が建国できたかどうか、疑問です。》(前掲書、11-12頁)

この一節を読んで、まず私は李承晩のことを何も知らないことに気づかされた。韓国の反日独立闘争の指導者であり、敗戦後の日本から竹島を奪った強硬な反日主義者くらいにしか考えていなくて、李承晩がどのような政治思想を持っていたのか、真面目に調べてこなかった。

そしてろくに調べもせずに、李承晩のことを《上海やアメリカに亡命し、反日テロを繰り返してきた李承晩グループ》と決めつけていただけだったのだ。

李栄薫校長はこう続ける。

《彼は当初、日本に対し好意的でした。一九〇四年、監獄で執筆した『独立精神』という本で、彼は日本民族の賢明さと勇敢さについて幾度か言及しています。一九〇五年、韓国が日本の保護国に転落したあと、さらに一九一〇年、韓国が日本に併合されて以後、日本に対する彼の態度は変わりました。彼は日本の侵略性を批判し続けました。独立運動を抛棄しない以上、そのような立場の変化は当然なことでした。

彼は、韓国民族が独立するという非常に稀な可能性を、いつか日本と米国が衝突する国際情勢の変化に期待しました。そのような彼の予言は一九〇五年から一九四五年まで、粘り強く続けられました。その長い期間、彼は、米国の政界と社会に向かって日本を「アジアを支配する野心を抱いた『みかどの帝国』」と言って批判しました。そのある部分は根拠のない煽動でした。彼の回顧によれば、彼は一生涯を煽動に生きた激烈な性格の所持者でした。ともかく、歴史は彼が煽動したように流れました。それで彼は、我々韓国人にとっては偉大な人物なのです》(前掲書、12頁)

李承晩は自由主義者だったが、韓国の独立を達成するために敢えて根拠のない煽動を続けたデマゴーギーになったというのだ。

しかも李承晩は、根拠のない反日宣伝を繰り返すデマゴーギーを、韓国が独立を達成したあとも続けた。本当に李承晩は自由主義者なのか。そう疑問を抱くのも当然だ、として李栄薫校長はこう続ける。

《李承晩は、自分がジェファーソン流の自由主義者であることを誇りに思っていました。彼は、自由な通商を通して世界が繁栄と平和の道を歩むようになる、と信じた。ただ、この点を想起すると、彼が大韓民国の初代大統領として採った強硬な反日政策は、簡単には納得しかねるところです。多くの日本人が、そのために李承晩に対しあまりよくない感情を抱いています》(前掲書、12-13頁)

日本側の疑問まで丁寧に掬おうとする李栄薫校長の度量の広さ、複眼的思想は見事だ。

●李承晩の反日政策の背景

自由主義者であるなら、なぜ李承晩は強硬な反日政策を採ったのか。むしろ、同じ自由主義陣営にいる日本との関係を強化することで、韓国の発展を目指すべきではなかったのか。

李栄薫校長は、そうした疑問から李承晩政権の当時の記録を読み込み、独立達成後も「反日政策」を取り続けた謎を解明しようとした。

《一九五〇年代の記録を細密に読んで行くと、彼の強硬な反日政策は建国の草創期にはほとんど不可避な苦肉の策だった、という考えに至ります》(前掲書、13頁)

当時の記録を細密に読んだ結果、強硬な反日政策を採り続けた要因の一つとして浮かび上がったのが、日本と米国の動向だった。

《彼は、韓半島に相当な財産を残したまま引き揚げて行った日本が、主権を回復したあと、韓半島に再び足を踏み入れるのではないかと警戒し続けました。米国は、日本を東アジア・太平洋防衛の基地に設定し、韓国がそれに協力するよう要求しました。米国は韓国に、日本に農水産物を輸出し工業製品を輸入する方式で国家経済を再建するよう慫慂しました。李承晩大統領はこのような米国の東アジア政策に反発し、そのような趣旨から日本との葛藤を極大化しました》(前掲書、13頁)

敗戦後、多くの日本人が着の身着のまま、命からがら満洲、朝鮮半島から引き揚げた悲劇の歴史は有名だ。私の故郷である福岡は、朝鮮半島からの引揚者の受入れ拠点の一つであり、現地に財産を残したまま、引き揚げてこなければならなかった人たちの苦難、悲劇はいまなお語り継がれている。

だがその悲劇は、敗戦によって日本人たちは、満洲、朝鮮半島に残した財産を手放さざるを得なくなった、という前提で語られているわけだが、李承晩大統領側は、必ずしもそうは考えてはいなかった。むしろ日本は独立を取り戻したら、朝鮮半島に残した財産を取り戻しにくる、朝鮮半島に再びやってくると「警戒」していたというのだ。

国際政治というのは、自国の立場だけから見ても分からない。相手の立場に立つと、全く異なる様相が見えてくることがある。

もう一つ、ここで指摘されているのは、米国の動向だ。たしかに米ソ冷戦の勃発を受けて米国は、それまでの日本弱体化政策から、反共の防波堤として活用するため、日本の経済的復興を支援する方向へと、対日政策を大きく転換させた(いわゆる逆コース)。

これは、ソ連や中国、北朝鮮と対峙していくうえで、米国が日本を重視する政策へと転換したということになるが、それは当時の李承晩からすれば、「なぜソ連、中国、北朝鮮と対峙するうえでアメリカが重視するのが韓国ではなく、敗戦国の日本なのか」ということなのだ。なぜアメリカは、自由主義者の李承晩と韓国ではなく、軍国主義者の日本を択ぶのか、というわけだ。

逆コースの意義については、私も『日本占領と「敗戦革命の危機」』、『朝鮮戦争と日本・台湾「侵略」工作』(ともにPHP新書)で詳しく書いたが、当時の米国が進める「逆コース」が当時の李承晩政権にとってどれほどショックだったのか、という視点はなかった。ある意味、それほど多角的に歴史を読み解くのは難しい、ということだ。

ともあれ、李承晩からすれば、独立した日本が再び韓国にやってくる脅威があり、しかもそれを米国が後押ししようとしていた。この日米の動向への反発から、李承晩は敢えて強硬な反日政策を唱えたのだ、という指摘は考えさせられるものがあった。

少なくとも、敗戦で日本は朝鮮半島への影響力を失ってしまったと受け止めていたのだが、李承晩からすれば、敗戦国になっても依然として朝鮮半島に対して、日本は強い影響力をもっており、強硬な反日政策を採らない限り、韓国は日本に飲み込まれてしまうと思っていた。私は敗戦後の日本を過小評価し、李承晩は過大評価していた、ということになる。この対日観のズレは深刻だ。

●韓国の独立を守るための反日政策

敗戦後も、朝鮮半島に対する日本の存在感の大きさは圧倒的だ。李承晩がそう考えるようになった要因は、当時の国内事情にもあった。

李承晩が戦後も強硬な反日政策を採った理由として、国内的要因もあったことを、李栄薫校長は次のように指摘している。

《一九四八年の建国当時の韓国人の正体は、曖昧極まりないものでした。人口の半分以上は字が読めず、絶対的多数は伝統小農社会の構成員でした。彼らに「自由」を説き聞かせるのは不可能なことでした。毎年、数千人が貧困と混乱に嫌気がさし、日本に密航して行きました。日本語で話し、日本の歌を歌い、以前の日帝時代を肯定的に記憶している人々も少なくありませんでした。野党は、日本との迅速な国交締結と経済協力を要求しました。李承晩大統領には、そのような安易な対日政策は再度の対日従属を招来する危険としか考えられませんでした。長い歳月にわたる独立運動の過程で形成された対日不信は、簡単に拭いさらえるものではありませんでした。一九五〇年代後半、日本政府が在日韓国人を北朝鮮に送還すると、彼の怒りは極に達しました》(前掲書、13-14頁)

この指摘も極めて重大だ。私なりに整理すると、以下のようになる。

第一に、韓国はせっかく独立を達成したのに、「韓国民」の大半は文字が読めず、国家の独立や自由の意義を理解できなかった。

第二に、よって韓国の自由と独立など眼中にない「韓国民」が毎年数千人規模で、自国の貧困と政治的混乱に嫌気をさして、日本に密航していた。

第三に、せっかく独立を達成しても、《日本語で話し、日本の歌を歌い、以前の日帝時代を肯定的に記憶している人々も少なく》なかった。そうした世論を受けて、《野党は、日本との迅速な国交締結と経済協力を要求》するほどだった。要は日本に頼って、韓国の経済をなんとかしようとしていたわけだ。

韓国の自由と独立を支持し、なんとしてもそれを守り抜こうとする「韓国民」が少ない一方で、《日本語で話し、日本の歌を歌い、以前の日帝時代を肯定的に記憶している人々も少なく》ない当時の韓国が、日本との迅速な国交締結と経済協力に進んだらどうなるか。《再度の対日従属を招来する》ことになると、李承晩が憂慮したのもある意味、当然のことだ。

李承晩は敢えて強硬な反日政策を唱えることで、自国民に「われわれは既に独立を達成した韓国民であり、日本人ではない。われわれは安易に日本に頼るのではなく、誇りある韓国民として、自らの力で自国の独立と自由を守らないといけないのだ」と訴えざるを得なかったというわけだ。

ある意味、日本の敗戦の結果、与えられた「韓国の独立」を実体化するため、李承晩は敢えて強硬な反日政策を唱え、「もう我々は日本人ではなく、韓国という独立国家の国民である」ことを国民に理解させる道を進まざるを得なかった、ということになる。

そのうえで、李承晩の反日政策を決定的なものにした事件について、李栄薫校長はこう指摘している。

《一九五〇年代後半、日本政府が在日韓国人を北朝鮮に送還すると、彼の怒りは極に達しました》(前掲書、13-14頁)

なぜ占領下の日本が在日韓国人を北朝鮮に送還したことが、それほどの怒りを買ったのか。少し解説しておこう。

当時の朝鮮半島は、米国主導の韓国と、ソ連主導の北朝鮮とに分断され、朝鮮戦争まで起こった。李承晩としては、韓国を自由主義陣営の国としてなんとか発展させようと必死だった。

その際、必要としたのが資金とマンパワーであった。特に日本で重工業や商業に携わってきた在日の人材を李承晩は必要としていたのだが、当時の日本は在日の人々に韓国、北朝鮮のどちらに帰国するのかを決めさせたのだ。その結果、在日韓国人でありながら北朝鮮に帰国する人がいたわけだが、それは、あたかも日本が韓国の敵対国である北朝鮮を支援しているかのように見えたのだ。

同じ自由主義陣営の国である日本がなぜ、共産圏の北朝鮮を支援するのか、李承晩の怒りはもっともなことだ。

●李承晩の「負の遺産」克服を

以上のように李承晩が戦後、強硬な反日政策を推進した理由について、李栄薫校長の分析を紹介してきたが、当時の事情を踏まえたその分析は、そもそも比較するのが失礼なのだが、私が26年前に『日韓共鳴二千年史』で書いたものとは比較にならないぐらい的確で、その考察は思慮深い。

もっとも李栄薫校長の分析を読んだことで、李承晩がなぜ反日政策を採ったのか、その理由の一端は理解できるものの、だからと言って日本としては強硬な反日政策、特に李承晩ラインの一方的な宣言と日本漁民の不当な拿捕と拘束、そして竹島の不法占拠などを容認したいとも思わない。

李栄薫校長の考察の凄いところは、こうしたわれわれ日本人の感情を受け止めたうえで、「日本語版 序文」において、われわれ日本人に対してこう訴えているのだ。

《この本で説明しているように、韓国人の反日敵対感情はその歴史的根っこが非常に深いものです。一九八〇年代以後の韓国政治史がそれを大いに助長もしました。それでも、独島(日本で言う竹島)紛争に典型的に見られるように、李承晩大統領の反日政策が残した副作用は大きく、今も長く尾をひいています。彼の理念と業績を再評価するための李承晩学堂の活動には、彼が残した負の遺産を克服する努力も含まれています》(前掲書、14頁)

戦後、李承晩が強硬な反日政策を採らざるを得なかった理由を、説得力ある形で解き明かしつつも、だからといって李承晩の反日政策が遺した副作用を放置しておくつもりはなく、その「負の遺産」も克服しようと思っている、と李栄薫校長は明言しているのだ。

なぜか。それは李承晩が本来、自由主義者であり、その自由主義の理念に基づいて韓国を再建し、日韓関係を再構築するのが李承晩学堂の役割だ、と考えているからだ。

韓国における反日史観の見直しの動きはいずれ、竹島不法占拠を含む李承晩初代大統領の反日政策の再検証にまで進むことになるだろう。それを見越して李栄薫校長は、『反日種族主義』に「独島、反日種族主義の最高象徴」と題する論文を寄せている。

李栄薫校長は、「序文」の最後をこう締めくくっている。

《『反日種族主義』日本語版の刊行に快く同意したのは、このことによって両国の自由市民の連帯が結成され強化されるならば、これ以上望ましいことはない、と思ったからです。隣国と分業し、通商し、協力し、競争することこそが自由人の真の生活姿勢であり、一国を先進社会に導く基本動力です。韓日自由市民の連帯は、北朝鮮に、さらに中国に、自由民主主義を普及させて行く堡壘としても、その役割を果たすことでしょう》(前掲書、14頁)

確かに韓国側の慰安婦や戦時労働者に関する「嘘」は、日韓関係に無用な政治対立を持ち込み、結果的に両国間の通商、協力関係を損ねてきた。

そこで、李承晩が推進した強硬な反日政策とその副作用としての反日史観を是正することで、両国間の《自由市民の連帯が結成され、強化され》ていくことを目指しているわけだ。

決して日本に迎合したり媚びたりするために、李栄薫校長たちは『反日種族主義』を書き、いわゆる反日史観の嘘を暴こうとしたわけではなかった。自由主義の原則に基づいて、李承晩以来の「負の遺産」である反日政策、反日史観を克服して自由主義の韓国を再建し、並行して日韓関係も再構築したい、と考えているのだ。

『反日種族主義』に代表される、韓国における近現代史見直しの動きは何を目指しているのか、日本側としても、できるだけ正確に理解を深めたいものだ。